

## モノと者の間にあるもの—ロボット研究から「モノ学」へのアプローチ(岡田 美智男)

### モノ学の冒険 第III部 モノと装置と知覚より p203-219

#### 【要約】

私たちはなぜ「モノ」を作るのか、なぜロボットを作るのか。それは私たちの思考が向かう対象であり、私たちの思考を制約し方向づけるもの、つまり思考の道具である。「私たちにとって何か役に立つモノを作る」というより、むしろ「その対象に対する憧れ」のような気持ちの中で、その対象に迫ろうとする行為の一端が「モノ」を作るということにつながっている。

「モノ」と「者」の違いは何であるのか。「者」は行為者としての内なる視点を持ち、自己の身体に備わる不完結さを自覚できる。周囲との関わりの中で自分らしさを追い求める関係論的な存在であり、他社との間で「場」を生み出すこともできる。「モノ」は内なる視点を持ってない。

一方で、ロボットはモノの中にあつて、行為者としての内なる視点を持てる稀有な存在である。ロボットが「モノ」と「者」の間にあるといえるのは、そのためだろうと思われる。

#### 【各項抜粋】

##### 1. 電車の中で

私たちは、ある対象との関わりの中で、石ころのようなモノになったり、一方的に指示を受けるだけのキカイになっていたりする。

##### 2. モノと者との間にあるロボット

「社会的存在 (social entities)」とは？モノと者との境界はどこにあるのか？ロボットはそうした議論の機会を私たちに与えてくれる。

##### 3. なぜ「モノ」を作るのだろう

「私たちにとって何か役に立つモノを作る」というより、むしろ「その対象に対する憧れ」のような気持ちの中で、その対象に迫ろうとする好意の一端が「モノ」を作るということにつながったのではないだろうか。これは「ロボットを作る」という行為にも重なるものである。

##### 4. 自動販売機からの「ありがとう」問題

本質的なコミュニケーションや「他者性」の問題に対して、ロボットはまだ「異邦人」のような新鮮な視点を私たちに与え続けてくれる。

##### 5. 「者」と「モノ」をわけもの

電車の中のおばちゃんのような「者」と自動販売機のような「モノ」を分けるもの、それは「場」や「コト」を生み出しうるものか否か、という側面から議論できる。

##### 6. 行為者の内なる視点からみた「身体」

行為者の内なる視点で捉えた「身体」は、不完全さを伴い、周囲の環境や他社との関わりの中でたち現れてくるような、その周囲との間で意味を求め続けるようなエコロジカルな「身体」である。それは「コト」や「場」を生み出す身体である。

##### 7. ロボットのデザインにおける二つのアプローチ

ロボットのデザインには、ロボット研究者の「身体観」「ヒト観」が反映されている。一つは「足し算としてのデザイン」であり、「実態としての同型性」を追求していくもの。もう一つは「引き算としてのデザイン」であり、「実態としての意味」をそぎ落としていくことで、むしろ「周囲との関わりからたち現れる意味」が顕在化する。

##### 8. 「手のかかる子どもほどかわいい」のはなぜか

##### 9. 「弱さ」をチカラにして

多能な機能を備えたロボットは、私たちとの間で繋がりを覚えることはないが、機能を引き算したロボットは、「弱さ」「不完結さ」によって人と「関係としての同型性」が感じられる。「引き算する」行為は、むしろ本質をえぐり出す行為である。

##### 10. まとめ